コラム　グレート・オーサーの国際性（１）　海外体験

本書で紹介することになった41の著作集を、今回とりあえずグレート・ワークス（Great Works）と名づけました（巻頭の「凡例」参照）。さて、そのグレート・ワークスの著者たち 41人を、ここではグレート・オーサー（Great Author　偉大な著作家）と呼ぶことにします。

彼らの仕事を見渡して気づくことは、全体として国際的性格が強いということです。これは、幕末の開国により日本が欧米の先進的な文明と出会い、政治・経済・社会・文化のあらゆる面で西洋の圧倒的な影響を受けながら、国家と国民の進路を探らなければならなかったことによるものでしょう。西洋を模範とするにせよ反発するにせよ、それとの緊張関係において、日本固有の伝統も、日本と近隣アジア諸国との関係も意識に上ることになったように思われます。そして、これは単に明治期にとどまらず、開国以来150年のこの歳月、日本人の思考の基底にあったものといっていいでしょう。

グレート・オーサーの国際性は、まず彼らの海外渡航・海外滞在に顕著に見られます。試みに、主なものを一覧してみましょう。

福沢諭吉：咸臨丸で渡米・滞在（1860）
　　幕府遣欧使節（1863）他
西周：オランダ留学（1862～65）
中江兆民：フランス留学（1871～74）
内村鑑三：米国留学（1884～88）
新渡戸稲造：米欧留学（1884～91）
　　国際連盟勤務（1920～26）他
岡倉天心：中国出張（1893）インド滞在（1901～02）米国勤務（1904）他
幸徳秋水：渡米（1905）
南方熊楠：米欧滞在（1886～1900）
柳田國男：国際連盟勤務（1921～23）
鈴木大拙：米国滞在（1897～1909）他
内藤湖南：欧州出張（1924～25）
吉野作造：欧州留学（1910～13）
河上肇：欧米留学（1913～15）
大杉栄：フランス渡航（1922～23）
田辺元：欧州留学（1922～24）
九鬼周造：欧州留学（1921～29）
和辻哲郎：ドイツ留学（1927～28）
柳宗悦：欧米視察（1929～30）
小泉信三：欧州留学（1912～16）他
河合栄治郎：英国留学（1922～25）
三木清：欧州留学（1922～25）
渡辺一夫：フランス留学（1931～33）

以上、ここでは幕末から昭和戦前までのものを挙げてみましたが、欧米以外に中国への渡航ももちろん多く、これも内藤湖南、津田左右吉、北一輝、竹内好などにおいて重要な海外体験になっています。当時は現在と異なり、外国に行くこと自体が大変困難な時代でした。彼らの海外渡航はすべてが官費・公費によるものではなく、なかには内村鑑三や南方熊楠のように苦学といっていい滞在もありました。ただ全体として彼らの海外体験は各人の生涯における転機であり、その後の思想や学問の実りにつながるものだったといえるでしょう。

そしてグレート・オーサーのなかでも極め付けの国際的知識人といえる新渡戸稲造と鈴木大拙、この二人が海外旅行よりさらに稀少だった国際結婚をしていることも注目に値します。新渡戸のメアリ夫人、大拙のビアトリス夫人はともにアメリカ人でした。

これほどに国際性を備えた学者・知識人をもちながら、昭和に入って日本は急速に国際的協調性を失い、孤立化と国粋化の道を進みました。その原因はともかく、内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心などのグレート・オーサーに顕著な、日本的伝統の尊重と国際性の両立がこのころに失われていったようにみえます。その意味で、1933年（昭和８）の新渡戸のカナダでの客死は象徴的でした。

参考文献『日本近現代人物履歴事典』
（秦郁彦編　東京大学出版会）